

2

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

—

ある日のことでございます。お釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶらお歩きになっていらっしやいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何ともいえない好い匂いが、絶え間なくあたりへ溢れております。極楽はちょうど朝なのでございましょう。

やがてお釈迦様はその池のふちにお佇みになって、水の面を蔽っている蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、ちょうど地獄の底に当たっておりますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、ちょうど覗き眼鏡を見るように、はつきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、健陀多という男が一人、ほかの罪人といっしょに蠢いている姿が、お眼に止まりました。この健陀多という男は、人を殺したり家火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございますが、それでもたった一つ、善いことをいたした覚えがございます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這って行くのが見えました。そこで健陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうといたしました。が、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命をむやみにとるといふことは、いくら何でも可哀そうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます。

お釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この健陀多には蜘蛛を助けたことがあるのをお思い出しになりました。そうしてそれだけの善いことをした報いには、できるなら、この男を地獄から救い出してやろうとお考えになりました。幸い、そばを見ますと、翡翠のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけております。お釈迦様はその蜘蛛の糸をそっとお手にお取りになって、玉のような白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれをお

下ろしなさいました。

一一

こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人といっしょに、浮いたり沈んだりしていた健陀多でございます。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくらやみからぼんやり浮き上がっているものがあると思ひますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといつたらございませぬ。その上あたりは墓の中のようにしんと静まり返って、たまに聞こえるものといつては、ただ罪人がつく微かな嘆息ばかりでございます。これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな地獄の責め苦に疲れはてて、泣き声を出す力さえなくなっているのでございませう。ですからさすが大泥坊の健陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかかった蛙のように、ただもがいてばかりおりました。

ところがある時のことでございます。何気なく健陀多が頭を挙げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとしたやみの中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るではございませぬか。健陀多はこれを見ると、思わず手を拍って喜びました。この糸に縋りついて、どこまでものぼって行けば、きっと地獄からぬけ出せるのに相違ございませぬ。いや、うまく行くと、極楽へはいることさえもできませう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもあるはずはございませぬ。

こう思いましたから健陀多は、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。もとより大泥坊のことでございますから、こういうことには昔から、慣れ切っているのでございます。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございませぬから、いくら焦つてみたところで、容易に上へは出られませぬ。や

やしばらくのぼるうちに、とうとう健陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなつてしまいました。そこ

で仕方がございませぬから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下がりがながら、遙かに目の下を見下ろしました。

すると、一生懸命にのぼったかきがあつて、さつきまで自分がいた血の池は、今ではもうやみの底にいつの間にかかくれております。それからあのほんやり光っている恐ろしい針の山も、足の下になつてしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかもしれません。健陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出したことのない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限りもない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻ありの行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませぬか。健陀多はこれを見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、しばらくはただ、大きな口を開いたまま、眼ばかり動かしておりました。自分一人でさえ断きれそうなの、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪えることができましよう。もし万一途中で断れたといたしましたら、せっかくここへまでのぼって来たこの肝腎かんじんな自分までも、元の地獄へ逆落として落ちてしまわなければなりません。そんなことがあつたら、大変でございませぬ。が、そういううちにも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這い上がつて、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せっせとのぼって参ります。今のうちにどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうのに違ちがひありません。

そこで健陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己おれのものだぞ。お前たちは一体だれに尋まいて、のぼつて来た。下りろ。下りろ。」と喚わめきました。

その途端でございませぬ。今まで何ともなかつた蜘蛛の糸が、急に健陀多のぶら下がっている所から、ぶつりと音を立てて断きれました。ですから、健陀多もたまりませぬ。あつという間もなく風を切つて、独楽こまのようにくるくるまわりながら、見る見るうちにやみの底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。

後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございませぬ。

お釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終をじつと見ていらつしゃいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな顔をなさりながら、またぶらぶらお歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、お釈迦様のお目から見ると、浅ましくおぼしめされたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんなことには頓着(まじとんじやく)いたしません。その玉のような白い花は、お釈迦様の御足(おみあし)のまわり(まわり)に、ゆらゆら(ゆらゆら)を動かして、そのまん中にある金色の蕊(うてな)からは、何ともいえない好い匂いが、絶え間なくあたりへ溢れております。極楽ももう午(ひる)に近くなつたのでございましょう。

(芥川龍之介「蜘蛛の糸」による。)

(注1) 蕊||種子植物の生殖器官。おしべやめしべの総称。

(注2) 頓着||深く心に掛けること。気にすること。

(注3) 萼||花のかく。

— この文章の内容や表現について説明する場合、どのように説明したらよいですか。次の1から4のうち、最も適切なものを一つ選びなさい。

1 地獄にいた犍陀多は、蜘蛛を殺さずに助けたことの報いに、お釈迦様が極楽から垂らした細い蜘蛛の糸をよじのぼつて、無事に地獄から抜け出すことができます。このような内容が、現在、過去、未来の表現を複雑にからませ、時間的な広がりをもつように書かれています。

2 地獄にいた犍陀多は、蜘蛛を殺さずに助けたことの報いに、お釈迦様が救い出そうとしたにもかかわらず、自分だけ抜け出そうとしたため、再び地獄に落ちます。このような内容が、敬体を主としたていねいな文末表現で、読者に語りかけるように書かれています。

3 お釈迦様は、蜘蛛を殺さずに助けたことの報いに、地獄にいた犍陀多を救い出そうとしますが、犍陀多が優柔不断であつたため失敗します。このような内容が、作品全体にわたって、お釈迦様の目を通して見ているように書かれています。

4 お釈迦様は、蜘蛛を殺さずに助けたことの報いに、地獄にいた犍陀多を何とかして救い出そうと懸命に働きかけます。このような内容が、お釈迦様の悲しみと苦しみを際立たせるように、視覚や聴覚などに訴える豊かな比喩を用いて書かれています。

二 次は、「二」の場面の一部です。この部分を朗読する場合の工夫について、あとの問いに答えなさい。(①から⑥は、文の番号を表す。)

①すると、一生懸命にのぼったかきがあつて、さつきまで自分がいた血の池は、今ではもうやみの底にいつの間にかかくれております。

②それからあのぼんやり光っている恐ろしい針の山も、足の下になつてしまいました。

③この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかもしれません。

④健陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出したことのない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。

⑤ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限りもない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。

⑥健陀多はこれを見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、しばらくはただ、大きな口を開いたまま、眼ばかり動かしておりました。

ア この部分を、話の展開に沿って大きく二つに分けるとすれば、どこで分けますか。次の1から5のうち、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 ①と②の間で分ける。
- 2 ②と③の間で分ける。
- 3 ③と④の間で分ける。
- 4 ④と⑤の間で分ける。
- 5 ⑤と⑥の間で分ける。

イ アで答えたところで二つに分けて朗読する場合、前と後ろとをどのように読み分けますか。次の1から4のうち、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 前は、不安を感じている様子が表れるように読み、後ろは、次第に不安が解消される様子が表れるように読む。
- 2 前は、不安を感じている様子が表れるように読み、後ろは、その不安が急に増大する様子が表れるように読む。
- 3 前は、希望をもっている様子が表れるように読み、後ろは、予想外の展開に驚いている様子が表れるように読む。
- 4 前は、希望をもっている様子が表れるように読み、後ろは、その希望がふくらんでいく様子が表れるように読む。

正答例【中学校国語B】

1
一 2
二 ウ
三 (例1)

ロボットは、人間にはできない危険な仕事をしたり、生活のサポートを
したりすることができるようになっている。これからはもつとロボットの
果たす役割が大きくなり、人間の生活に欠かせない存在になると思う。

(例2)

人とコミュニケーションをとることができるロボットが増えれば、逆に人
と人とのコミュニケーションに問題が生じるのではないか。

2
一 2
二 ア 4
三 イ 3
(例1)

私は、**中山**さんの考えに賛成します。「三」の場面がないと蜘蛛の糸
が「短く垂れているばかり」で終わるため、話が印象的で余韻が残るし、
どうして蜘蛛の糸が切れて犍陀多が地獄に落ちてしまったのか、自分で考
えてみる事ができるからです。

(例2)

私は、**木村**さんの考えに賛成します。「二」で終わると、犍陀多が地
獄へまっさかさまに落ちてしまった場面で終わり、地獄から抜け出す機会
を与えたお釈迦様の話に戻らないため、話が途中で切れてしまうように感
じるからです。

3
一 4
二 (例) 著者名、登場人物 (本の内容、コピー(宣伝文句)なども可)
三 (例) 三人が作った広告カードは、対象者が中学生であるのに対し、店長さん

が紹介してくれた広告カードは、中学生に限らず幅広い年齢層の読者を対
象としている。